

大友時代を 生きた人々

鹿毛 敏夫



大友親治は、戦国時代前半の武将・戦国大名。寛正2(1461)年に生まれ、大永4(1524)年に没した豊後大友家第18代当主です。

明応5(1496)年、17代当主大友義右が病で早逝、その父政親も周防・長門(山口県)の大名大内義興に敗れて死没します。この直系家督断絶の混乱を收拾したのが、政親より17歳年下の実弟親治でした。

親治は、室町幕府管領として実権を握る細川政元と、その傀儡将軍足利義澄に接近して支持を得ます。これに、政元のクーデターで失脚した前将軍足利義隆と大内義興が対抗。親治の伯父大友親綱(13代)の六男で僧侶の大聖院宗心を擁立し、親治に干渉してきます。

最終的に親治は、宗心らを退けて家中をまとめ、守護大名大友家の戦国大名への脱皮を成し遂げたと評価されます。加えて、親治の功績は外交にも及びます。

15世紀初頭に足利義満が始めた「勘合」(正式通交船であることを証明する割符)による日明間の外交・貿易は当

初、「日本国王」の認定を受けた足利将軍のみが行う国家

大友親治

外交でした。ところが、将軍の権威が衰え、幕府が経済的に困窮した15世紀後半以降、勘合は経済力をもつ有力大名に売り渡され、細川氏や大内氏などの地域大名が日明外交を主導するようになります。この地域大名外交のブームに積極的に対応したのが、大

友親治でした。「大友家文書録」によると、文亀元(1501)年、親治は、将軍足利義澄に働き掛けて、勘合を獲得します。その見返りの献金額は不明ですが、当時の遣明船貿易1艘の利益に鑑みると、莫大な額と推測されま

「南海1号」の船倉を埋める大量の陶磁器 (広東海上シルクロード博物館・中国広東省)



外交貿易に積極的に対応

獲得した勘合を携えて派遣した親治の遣明船を彷彿とさせるのが、「南海1号」と名付けられた南宋時代の沈没船です。中国広東省陽江にある広東海上シルクロード博物館では、海中で見つかった800年前の沈没船を前後の泥砂ごと切り取って引き揚げ、建物内にパッケージして公開しています。

ガラス張りの足元から考古学調査の様子をのぞくと、全長約30mの沈没船に14の船倉があり、そこに10万点を超えるおびただしい数の青磁・白磁の皿や碗、貨幣、金・銀・銅・鉄器などが積み重ねられていたことが分かります。沈没や漂流のリスクを抱えながらも、海外へと貿易船を派遣する船主・荷主の商魂のたくましさ

が伝わってきます。中世大友家400年の繁栄を経済的に支えたのは、親治ら歴代当主による積極的な外交貿易政策だったと言えます。

(名古屋学院大学国際文化学部教授)